

平成 24 年度第 7 回小学校ゼミナール記録

2012 年 12 月 4 日(火)

於：広島大学教育学研究科

参加者：影山和也 (広島大学講師), 他 13 名

1. 協議事項

三つのグループに分かれての算数科における授業作りの議論

2. 協議内容

小学校四年生の小数を整数で割る授業の第一時に焦点を当てた授業作りを最終目標として、今回は目標や言語活動等の議論を行った。

次に、議論の内容について述べる。授業内容に関する議論としては、除法の筆算を行う際の小数点を打つタイミングについてや、「7.2 m のテープを 3 m ずつ切って花飾りを作った場合、花飾りは何個出来るか。」という問題に対して、 $7.2 \div 3 = 2.4$ より 2 個が答えとなるのか、 $7.2 \div 3 = 2$ あまり 1.2 より 2 個が答えとなるのかについて、更に後者の答え方に関しては、余りの 1.2 の扱いはどのように行うのか等の具体的な内容の議論となった。しかし、そもそも授業の目標を明確にせずに、人それぞれの観点から議論が行われていたため、議論はなかなかまとまらなかった。

そこで、授業作りに欠かすことの出来ない目標の設定に議論が移り、目標こそが授業作りにおける腕の見せ所であることが主張された。「リテラシー」や「生きる力」といった言葉に端的に現れているように、今日の教育目標は学力から能力へとその力点を移している。無論これは「知識基盤」や「生涯学習」あるいは「高度情報」と形容される現代社会を反映したものである。したがって、社会進出のための手ほどきという側面をもつ義務教育の一翼を担う算数科においても、教科内容の伝授を目指すのみならず、思考力・判断力・表現力の育成をも視野に入れた授業実践が求められる。そして、そのため方法の一つが新学習指導要領改訂の方針で示されている「言語活動の充実」であろう。

しかし、「算数科における言語活動の充実」は必ずしも明確なものではない。ここから、本授業において「算数科における言語活動」のモデルを提案する、という研究授業の方向性が示唆された。また、言語活動の充実を図る活動として、①事実を説明すること、②手順や解決方法を説明すること、③理由を説明すること、の三つが挙げられ、これら三つ全ての活動を取り入れた授業でなくてもよいが、取り入れる活動に関しては算数科特有のものにしていく必要がある。まずは、これらの活動を考慮に入れた授業作りを行い、具体化していくことによって議論の対象を作らなければならない。

最後に、今後の課題としては上述と同様であるが、具体的な内容に関する課題は完成した指導案の中でしか明確にならないため、まずは一通りの指導案を作成することである。

(文責：福田博人)